

令和7年度 兵庫県立和田山特別支援学校 学校評価報告書

1 教育目標		
個々の実態や特性等に応じた指導の充実を図り、社会の一員としてたくましく生きる力を育成し、生命と人権を大切にしたいところ豊かで自立する人づくりをめざす。		
n = 74		
2 重点課題		
(1) 危機予防・対応が可能な学校づくりの推進	(2) 主体的、対話的で深い学びにつながる授業改善	(3) 社会参加を踏まえたキャリア教育の推進
(4) 教職員の専門性の向上	(5) 兵庫県版コミュニティ・スクールを核とした学校づくりの推進	

3 判定			
重点課題に対して、各学部・係部が設定した取組を全職員で評価し、その平均点をA～Dの4段階で評定した。			
A：良好（評価平均3.5以上）	B：概ね良好だが一層の取組が必要（評価平均3.0以上）	C：取組に相当の工夫が必要（評価平均2.0以上）	D：取組の見直しが必要（評価平均2.0未満）

重点課題	重点課題についての目標（学部・部）	目標実現のための取組	判定	次年度に向けて	担当
危機予防・対応が可能な学校づくりの推進	危機に対応できる学校組織の構築と防災教育の推進	災害時・緊急時に対する備え（非常食、バッテリー、ヘルメット、簡易トイレ等）を充実させる。	A	災害時・緊急時に対する備えをより一層充実させる。	総務部
		これまでの火災訓練や地震避難訓練（ショート訓練）の内容や防災マニュアル（避難経路や避難方法）を見直し、より実践的な訓練に移行する。	A	消防署から指導助言を受ける機会を設け、防災体制の見直しを図り、より実践的な訓練を実施する。年度初めに危機管理マニュアルを用いた教員研修を実施する。	
		発達段階に応じた防災学習の実施に向けた指導体系を整備する。	A	児童生徒に知識や機能を身に付けさせ、主体的に判断し行動する力を育成できるよう、今年度作成した「発達段階別防災学習体系表」を活用し、防災教育の充実を図る。	
	児童生徒が安全に活動できる緊急時の体制整備	救急連絡体制や捜索体制等のマニュアルの見直しを行う。	A	緊急時の体制がスムーズにとれるように救急対応カードを作成した。引き続き緊急時の体制の検討、見直しを行う。	生活安全部
		医療的ケアが必要な児童生徒をはじめ、様々な実態の児童生徒にとって危険な場所や事案がないかを調査、協議し、ケーススタディの実施やヒヤリハット事案等の情報共有を行う。	A	ヒヤリハット事案は、学部会や朝礼などで速やかに情報共有できるよう次年度も推進する。ケーススタディは、指導医や学校医、看護師等の指導助言を仰ぎ、各学部と連携して実施する。	
	いじめの未然防止・早期発見	児童生徒の心の変化や生活の様子を知ることができるように生活アンケートの項目を見直し、年に2回実施する。	A	生活アンケートは、児童生徒の実態に応じて2種類のうちから選択し、年間3回(各学期1回)実施した。児童生徒が回答しやすいように工夫したり、項目について検討したりして改善する。	
	安全・安心な学校づくりの基盤整備の推進	児童生徒が安心して学習ができる環境の美化整備及び施設設備の維持に努める。	A	児童生徒が安心して学習ができる環境の美化整備及び施設設備の維持に努める。	事務部
	「できた」「うれしい」「心地よい」と感じる経験を通して、児童が主体的に活動する態度の育成	児童が主体的に活動できる授業を展開するため、指導者が支援計画や指導計画を基につけたい力について共通理解を図る。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの中で支援計画・指導計画の読み合わせを行い共通理解を図り、学習の目的や支援方法などを日常的に（週に一回程度）共有するための打ち合わせを行う。 ・主指導やサブの教師の動きを明確にした授業づくりをすることで、支援に入る教師を減らし働きかけを最小限にとどめる。 ・児童の発信を可能な限り待った主体的に活動できる雰囲気づくりを行う。 ・クラス内の「つきたい力」を具体的に共通理解し、そして将来何につなげていくのかを明確にする。 ・大きな成果のみを目標とせず、スモールステップを大切に学習を展開していく。 ・日々の学習の様子や教師の悩みなどを出し合う場を設定する。 ・声かけしすぎ、支援しすぎの場面が多いことがあるため、児童に考える時間を持たせることや、小さい失敗する経験（安全には配慮する）させようとする。 ・「今のはもっと待ちましょう」など教師同士声をかけあうことや、建設的な意見を出し合い、児童生徒が主体的に活動できる授業づくりを推進する。 	小学部

主体的、対話的で深い学びにつながる授業改善		会議や打ち合わせを行って、児童の障害や発達等の実態について多面的に把握し、児童の生活に即した体験的な学習を実施する。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研のグループ学習では、クラスを超えた教師集団で児童の実態や支援方法を話し合うことができた。物の受け渡し、その時に言う言葉「どうぞ」「ありがとう」を授業で体験し、般化できつつある。授業を終えることに、短時間でも教師同士で反省し改善することで児童の実態把握、支援を共有する。 ・生活単元学習では季節の行事をこなすだけの単発的な授業が多くなりがちだったので、日常生活に生かすことのできる内容かつ実態に合った授業づくりを行う。 ・障害の種類や程度の実態差が大きい集団のため、個々に合った内容を設定することは難しい。単元学習で授業を繰り返す中で、サブの教師が具体的な授業改善の提案を出し合い、授業づくりを行う。 ・日々の集団学習での振り返りの場が必要である。率直に意見を出し合うことのできる学部集団づくりを推進するため、教員間で教材や支援方法などに関して配慮が必要な児童への対応を共通理解し、授業づくりを推進する。 	
	生徒の実態に応じたグループ学習の充実	生徒の実態を多面的に捉えて授業展開ができるように、学部会等で生徒について情報交換を行う。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度も、多面的に生徒の実態を捉えて授業に生かせるように、教員同士の打ち合わせ時間を設けて情報共有をしていく。 ・次年度は、学年・学級会の時間を設定し、生徒一人一人の指導について話し合える時間を設けていく。 	中学部
		主、副指導者の役割を工夫し、生徒が主体的に学べるような授業のしかけを行う。	A	生徒同士の協働的な学びにつながるような集団づくりを行う。副指導者の効果的な立ち位置を考え、生徒の主体性を引き出せるようにしていく。	
	身近な課題や活動に自ら関心を持って取り組む力の育成	他学年の生徒との関わりを持つことができるような場を設定し、生徒同士が互いに学び合い、教え合う、協働的な学びができるように工夫する。	A	縦割りの学習グループでの学習を行う体制や生徒同士が交流できる環境を継続するとともに、学部の教師全員が学部の生徒全員に関わることができる体制づくりを推進する。	高等部
		生徒の実態に応じた学習グループの編成やICT機器の活用による学びが深まる環境の工夫を行う。	A	生徒の実態に合わせて、柔軟に学習グループの編成と修正を行えるシステムを継続する。	
	児童生徒の実態、進路に応じた教育課程の検討	児童生徒の実態を捉えながら、教科等の編成や時間数、時間割を見直し、検討及び再編成をする。	A	本年度編成した教育課程等について、児童生徒の実態に即しているか評価・検討を行う。	教務部
		大学入試を見据えた教育課程の編成、カリキュラムの見直しを行う。	A	総合的な探究の時間、情報科の学校設定科目について、見直しを行った。今後も、生徒が授業で学んだことを生かし、大学等への進路選択ができるようなカリキュラム・マネジメントを行う。	
	児童生徒が主体的、対話的に取り組む食育の推進	食育に児童生徒が興味関心を持って主体的に取り組むことができるように全校集会や委員会活動の活動内容を工夫したり、各教科と連携して実施したりする。	A	セレクト給食を年間3回実施した。3回目は全校生のアンケート結果を元に児童生徒会がセレクトするメニューを決定するなど、児童生徒が主体となる活動を行うことができた。引き続き、児童生徒が主体的に取り組めるように活動内容を工夫する。また、全校集会での縦割り活動の充実を図る。	生活安全部
		活動内容の発案や検討について、児童生徒会を中心とした生徒主体で行えるように指導や支援を行う。	A	本年度に引き続き、活動内容の発案や検討を生徒主体で行えるように指導や支援を行う。	
	卒業後を見据えた支援方法の改善	日常生活における支援方法について、児童生徒の主体性を引き出せるように外部機関からの助言を授業に生かす。	A	外部機関の助言を基に、児童生徒一人ひとりの主体性を高めるための支援方法を校内で共有・実践し、支援の一貫性を高める。	進路指導部
児童一人一人のコミュニケーション課題に応じた支援方法の工夫	児童生徒と同じ目線に立ち、児童の好きなことで一緒に遊んだり、活動したりすることで、やりとりしたい気持ちや感情を共有する授業づくりを行う。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・児童は休み時間に好きなことで遊ぶ体験を積み、教師の袖を引っぱったり、トイレの写真カードを貼ったり、ジェスチャーで示したりと様々な方法で思いを発信することができた。昨年度は大人を相手として遊んでいたが、子ども同士で遊ぶことができるようになってきている。次年度は、教員同士が児童一人一人の発信方法を共通理解する機会を設ける。 ・児童同士と一緒に活動したり、クラス間で交流する機会を増やしたりするなどして、児童が他者や仲間に対する意識を持つ機会を意図的に計画をする。 	小学部	
	児童の実態に応じて、言葉だけではなく、実物や写真カード、具体的な動作等でわかりやすく示す。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の支援方法について、放課後の打ち合わせや会議等でクラスや学部で指導・支援をこまめに共有しあう。 ・OJTで指導方法等について担当者間で伝え合うようにする。 ・児童の学習支援に必要な教材について教師間で活用方法等、共通理解する。 		

社会参加を踏まえたキャリア教育の推進	キャリア教育の視点を取り入れた段階的な進路指導の実施	学年ごとに段階的な進路指導を企画立案する。	A	次年度も引き続き、各学年に応じた進路指導を行っていく。学部間での報告会や高等部見学、トライやるデイズ等を通して、進級・卒業後の自分の進路について考える機会を設ける。	中学部
		懇談会や日々の連絡帳等により保護者や生徒のニーズを聞き取り、進路指導部と連携をして生徒の実態に応じた学びを充実させる。	A	次年度も継続実施する。	
	社会的・職業的自立に向けた必要な能力や態度の育成	キャリア発達段階表を活用し、各学習グループの教師間で情報共有を行う。	A	複数の教師で検討しながら発達段階表のチェックをしたり、確認をしたりして継続して取り組む。さらに、就労アセスメントを受ける生徒は、その評価と照らし合わせたり、参考にしたりにして、より客観的に実態把握できるよう工夫する。	高等部
		卒業後に向けて身に付けさせたい力を意識した授業を計画・実践する。	A	実態把握の情報やそれに基づく目標を、クラス・学年だけでなく、縦割りの学習グループ間でも共有できるようにし、共通理解した上、全員で指導・支援に当たる。	
		作業学習や就労体験活動「わとくカフェ」等の活動において、実態に合った役割を任せたり、目標設定や振り返りの学習を設定したりし、働くことへの関心と意欲を高める工夫を行う。	A	振り返りの持ち方についての検討が十分でできなかったため、次年度も重点的に取り組む。	
	キャリア教育の充実	キャリア教育の観点を取り入れた授業づくりを実践するために、キャリア教育発達段階表を基にキャリア教育の観点を指導案に記入し、指導者の共通理解を図る。	A	本年度は、キャリア教育を意識するため、指導案（指導略案含む）にキャリアの観点を記入した。次年度は、キャリアの視点を踏まえながら、将来の自己実現につながるような授業づくりができるようキャリア教育発達段階表を生かした授業づくりを推進する。	教務部
		体系的・系統的なキャリア教育を目指すためのキャリア教育研修会を行う。	A	支援研修部、進路指導部と連携して研修を行うことができた。次年度も、各学部、校務部と連携しながら社会参加を踏まえたキャリア教育を推進できるよう、研修会をはじめ職員への理解・啓発を行う。	
	キャリア教育を踏まえた授業づくりの推進	教務部、進路指導部等と連携し、全体へ情報発信及び共通理解を図る。	A	本年度に引き続き、各学部や新設される進路指導部と連携して情報発信を行い、キャリア教育について共通理解を図る。	支援研修部
		小・中・高等部の教師全員で子どもにつけさせたい力について考え、意見交換を行い、授業づくりの柱とする。	A	公開授業ウィークを設定し他学部を知る機会を設ける。学部会や学部研修日等において、子ども達につけさせたい力について共有し、キャリア教育を踏まえた授業づくりに生かせるようにする。	
	進路実現に向けて主体的に考える態度の育成	進路について、体験的に学習する機会（トライやるデイズ、現場実習、個別実習、職能評価、しごと体験フェア等）を設定する。	A	本年度に引き続き、体験的に学習する機会（トライやるデイズ、現場実習、個別実習、職能評価、しごと体験フェア等）を設定し、生徒の自己理解を深める。	進路指導部
卒業後の社会生活に向けて、福祉サービスや相談機関などについての学習を行い、自分の卒業後の暮らしを具体的に考えられる機会を設ける。		A	本年度に引き続き、卒業後の社会生活に向けて福祉サービスや相談機関などについての学習を行う。学習を充実させるため、生徒自身が外部機関からの助言等を聞き、自分の卒業後の暮らしをより具体的に考えられる機会を設ける。		
卒業後の生活を見通し、社会性、身辺自立、生活力等の向上を目指した支援の充実	学部担任、保護者、担当グループや全体での情報共有を密に行う。	A	毎日午前午後と2度の引継ぎで、生徒の状況を共通理解することで、指導員全員が生徒の体調面や日々の変化を把握する。	舎務部	
	障害特性、課題、生育環境などの把握を丁寧に行い、支援方法の検討、見直しを適宜行う。	A	新年度や学期ごとに、舎生の危険と防止の観点について生徒情報を共有し、生活力の向上を目指す支援をする。		
教職員の専門性の向上	研修会の充実	多様な教育ニーズに対応するため、特性理解や身体の学習、人権等に関する研修会を企画、実施する。	A	肢体不自由や知的障害、特性理解、人権等に関わる内容を中心にした研修の企画、情報提供を行い、教職員の専門性の向上を図る。	支援研修部
	寄宿舎指導員としての実践と専門性の向上	各係の研修担当者を中心に全体で舎生それぞれの課題設定や支援方法を検討し、実践する。	A	舎生担当者が中心となり、生活目標の課題設定や支援方法を検討し、全員で共通理解し支援に生かす。	舎務部
		様々な機会を設け、保健、生活、防災等の研修を行う。	A	舎生の生活や舎内における防災の観点から、防災訓練や救急法、情報端末機器についての指導員向け研修を企画し、今後の生徒対応へも生かす。	

兵庫県版コミュニティ・スクールを核とした学校づくりの推進	地域・家庭と連携した防災体制の構築	災害時引き渡し体制の構築と福祉村と連携した防災避難訓練を実施する。	A	危機管理マニュアルに基づいた確実な引き渡し方法について、保護者と共通理解を図り、引き渡し訓練を実施する。地域、近隣施設等と連携・協力し、災害特性や本校の実態に応じた防災避難訓練を実施する。	総務部
		保護者や地域を巻き込んだ防災学習を計画、実施する。	A	防災マップの作成や避難訓練など防災に関する取組を保護者や地域に発信し、保護者・地域を巻き込んだ防災意識の向上へと繋げ、防災学習への参加を促す。	
	学校、家庭、地域の連携による進路実現	合同学習会等の進路学習会を開催し、保護者に情報を収集する機会を提供する。	A	本年度に引き続き、合同学習会等の進路学習会を開催し、保護者に情報を発信する機会をより充実させる。	進路指導部
		移行支援会議を開催することで、各関係機関との情報共有を行い、卒業後の地域における支援体制づくりを行う。	A	本年度に引き続き、移行支援会議を開催することで、各関係機関との情報共有を行い、卒業後の地域における支援体制づくりを行う。	

<p>4 学校関係者評価</p> <p>【学校評価について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校評価の判定が、すべての項目でA判定となっている。評価をする取組の内容について、学校として目指す姿を踏まえながら検討をした方が良いのではなかろうか。すべてAになることが目標ではないはず。 ・すべての判定がAでは、次に取り組む課題へのつながりがないように思えて気になりました。 ・次年度に向けては、何ができて何ができなかったのかを具体的に明示する必要があるのではなかろうか。 ・判定のA、B、C、Dの判定基準となる評価の平均値について、平均値の間隔が不均一なので、均一化した方が良いのではなかろうか。 ・判定をするための評価を5件法で行っているのは良いことだ。「どちらともいえない」と思う人はいるはずなので、この項目は必要である。 ・次年度に向けた取組で、昨年度と同じという記述があるが、一歩でも前進するような機運を持って取り組んで欲しい。昨年度と同じは、良くない。 <p>【保護者アンケートについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者が概ね好意的であることが伝わってくる。 ・自由記述で厳しい意見があるが、学校は保護者に向けて自分たちの取組をしっかりとアピールすることができていないのではいだろうか。 ・児童が道を横断して下校しなければならないことについて、安全確保のために横断歩道の設置要望を早急に行った方が良い。 ・担任制に関する記述があるが、教員間でしっかり生徒の特性や様子などの情報共有をすることが必要になってくると思われる。 ・寄宿生生のみに関する項目があるが、調査内容を踏まえると寄宿生のみではなく、全児童生徒に対して調査しても良い内容だと思う。寄宿生に対しては、寄宿生ならではの事項を調査すればよいのではなかろうか。 <p>【教育活動について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高等学校等DX加速化推進事業に係る取組に新しい可能性を感じた。ICT機器を活用することで、今まで指導上うまくいかなかったことが、できる可能性を秘めている。社会とのつながりをどのように作り、そしてどのようにアピールしていくのかを定めながら取り組んで欲しい。 ・ICT機器を活用した取組を就労先にどのようにアピールしていくのか。すべての生徒がICT機器の活用を得意としているわけではない。既存の活動とICT機器を活用した新たな活動を二軸で行うことが大切である。 ・3Dプリンターの取組に未来に続く可能性を感じた。障害があっても社会で当たり前働き生活できる。3Dプリンターでの取組は、商品の依頼元が誰なのか、販売先が誰なのかが見える取組である。利益を得ないのであれば、事業所等に商品と一緒に考えて欲しいというように話を持っていくと、いろいろな事業所からの依頼が見込まれるのではなかろうか。 ・UDeスポーツ交流会を参観日に実施されたので、保護者も体験できてよかった。 ・3Dプリンターの取組は保護者としても嬉しい。商品を楽しみにしている。どの商品が作られたのかやどの場所に行けば商品を購入できるのかなどの情報を知らせて欲しい。 ・仕事体験フェアを通して、一人でも就労につながれば良いと思う。 ・わとくカフェ等の活動は良いと思う。 ・生徒に合わせた授業や活動を計画して実施している。 <p>【学校運営協議会について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地教法のコミュニティ・スクールに移行した場合、基本方針の承認を運営協議会で得て活動するところが一番大切な観点となる。年度末には活動の振り返りと次年度の基本方針の検討を行うことが大切である。 ・地元の竹田地区との活動を行うにあたり、民生委員と連携することが考えられる。次年度の活動計画に入れ込んでもらおうと良いのではなかろうか。 					
---	--	--	--	--	--